

「この子らを世の光に」

金沢大学 河合隆平

この子どもたちにも、人に生れて人間になるための発達の道すじを歩んでいることに変わりはない。そう考える人たちがいる。障害をうけている子どもたちから、発達する権利を奪ってはならない。どんなにわからないことが多くても、どんなに歩みが遅くても、社会がこの権利を保障しなければならない。そう考える人たちがいる。

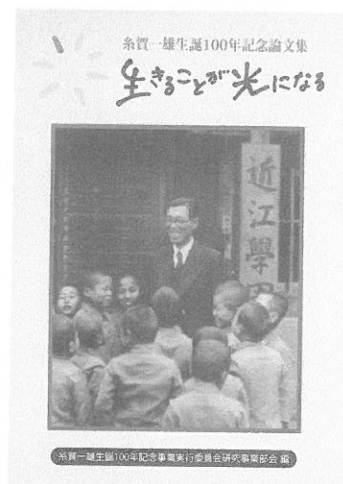
びわこ学園の療育記録映画『夜明け前の子どもたち』(1968)のナレーションの一節。糸賀一雄はつねに「そう考える人たち」の中心にあって「そう考える人たち」を育て励まし続けた。「〈人〉をつくり、また〈人〉につくられた学園であった」。糸賀は近江学園の歴史をそう表現した。『夜明け前の子どもたち』のハイライトである「シモちゃん的笑顔を生み出したとりくみを「シモちゃん」の場合だけに終わらせず、障害の重い子どもが生きることを支え励ます営みがどの地域、どの施設・学校でもひとしくとりくまれるような条件をつくり出す努力が重ねられていった。「そう考える人たち」はそうした自分たちのとりくみのねを「発達保障」という言葉に託

して分かち合い、社会の人びとに語りかけた。糸賀の思想は「そう考える人たち」のとりくみの深みから「この子らを世の光に」ではなく「この子らを世の光に」へとたどり着く。

*

世の中にきらめいている目もくらむような文明の光輝のまえに、この人びとの放つ光は、あれどもなきがごとく、押しつぶされている。その光は異質の光なのである。…それはこの人びとから放たれているばかりでなく、この人びとと共に生きようとしている人びとからも放たれている。

「この子らを世の光に」とは、社会の人びとがひたすら高度経済成長の坂道をかけ登るなか、障害のある人びととともに生きることが「異質」ではなく、社会のあるべき姿なのだということに目覚めゆく時代の「夜明け」を告げる言葉であった。いまだ明けきらぬ「夜明け」の地平に眼を凝らし、社会全体が「夜明け」を迎えるために何が必要なのかを考え合い、それを実現していく道すじを探ろうとする人びとが手を結び合うように「全国障害者問題研究



(糸賀一雄生誕100年記念事業実行委員会研究事業部会)

糸賀一雄さん

いとが かすお / 1914年～1968年。1938年、京都帝国大学文学部哲学科を卒業。滋賀県庁に務めた後、1946年、池田太郎、田村一二とともに近江学園を開設し園長となる。著書に『この子らを世の光に―自伝・近江学園二十年の願い―』(柏樹社)、『福祉の思想』(NHKブックス)など多数。

会」は生まれた。1967年8月のことである。その翌年1968年9月17日、糸賀は滋賀県の職員研修中に倒れ、病院に搬送されてから24時間を生きて、9月18日に54年の生涯を終えた。

一人ひとりが糸賀と対話しながら、糸賀が「この子らを世の光に」に込めたねがいを、障害のある人びとのねがいや悲しみに重ね合わせながら、自分たちの言葉で語り合う。そうして紡ぎ出される言葉にこそ「みんなのねがい」を寄せ集め、社会をつくり変えていくちからが宿るのだと思う。糸賀であったら、今どんな言葉を紡ぎ出すのだろうか。

(かわい りゅうへい)